

けでもないはず、後は適当にやることとして始めてみて、大変な仕事であると知らされた。

とにかく時間が来ればソ連兵が引き取りに来て連れて帰るのだ。それが兵の役目であるらしいが、農場の方ではノルマを計算し、文句は後からついて来るのだ。

【執筆者の紹介】

現住所 岩手県遠野市六日町九一三

生年月日 明治四十五年七月二十四日

入 隊 昭和十九年十月十四日

ハルビン陸軍病院

入 ソ 昭和二十年十月

抑留地 クイブシェフカ

帰国年月日 昭和二十三年十一月二日

(岩手県 菊池 隆)

次世代へのメッセージ

(戦後五〇年に想う)

岩手県 川口 純二

昭和十八年徴兵検査で甲種合格、鉄道兵第十番と徴兵官の通達を受けて、満州国関東軍牡丹江第六六八部隊鉄道第四連隊に入隊したのは、日本の敗色濃い十九年一月十日。小生二十一歳であった。鉄道第四連隊で鉄道兵としての基本教練(第一期)約六カ月を終え、いよいよ鉄道兵として各員はそれぞれ特技教育に入った。私は鉄道全般の教育を受けるため、原隊において激しい特訓を受けた。

「鉄道兵は、普通の戦友以上に固い絆で結ばれており、裏方役を務めるだけあって、仲間同士の連帯意識は強かった」

昭和十九年後半〜二十年初冬にかけて戦況も急を告げていた。約七〜八カ月間の連隊での特技訓練も高度

教育であった。陸士出身の小隊長（教官）、教育係の班長、助手と約三十人の同年兵は競って訓練に励んだ。古参兵も皆良い先輩で、機会あるごとに「田満会」と称する懇親会が催されていた。実に懐かしい。

戦雲は急を告げていた。教育実技訓練を終了し、三月に入ったある日、非常呼集とともに、我が連隊は満州国と朝鮮との国境安東く新義州に向かった。国境を流れる鴨緑江に（当時、鮮満国境は安東と新義州の間、鉄道橋梁一本で繋がれていた）、仮迂回橋の本橋架設による鉄道橋梁を通す「緑演習」に参加したのであった。

着任地、現在の北朝鮮新義州に配属された。雪解けの水に漬り苦しい架設に携わった。ある時は鉄路の工事中足を滑らし水中に没したり、負傷する者など、つらい作業であった。五月三日の鉄道開通式を目前にした前日に原隊復帰を命ぜられて、楽しみにしていた開通式祝賀の美酒を後にして牡丹江の連隊に帰ったのであったが、実に残念であった。息つく間もなく原隊内務班で命令が伝達された。昭和十八年徴集兵である私

は、ハルビン鉄道第二〇連隊教育隊に教習のため配属となる。激しい教育訓練の終了と同時にハルビン駅周辺勤務を命ぜられ、日夜輸送業務を遂行していたのでありました。

突如八月九日未明、ソ連軍の侵攻怒濤のごとく、あらゆる国境から満州へ進入したのである。

時既に我が日本は、八月六日原子爆弾を受けて戦争続行は不可能な状態であり、ポツダム宣言の直前であった。

八月十五日、日本はポツダム宣言を受諾、ついに無条件降伏のやむなきに至り、軍隊の武装解除……無念の涙をのんだのであった。

私も鉄道警備の任務についていた（ハルビン駅周辺）が、間もなくして終戦の詔勅を聞いた。万感胸に迫り、隊員、皆、嗚咽した。交戦わずか六日間、関東軍は壊滅し無抵抗状態であり、ソ連軍は占領地域からあらゆる軍需、生活物資を略奪したのであった。幾日もなくして、ソ連軍将兵が我が連隊にも殺到、手に手に銃、ピストルで威嚇しながら進駐して来たのである。まる

で獲物を漁る野獸集團の様でありました。

連隊長の命令に従って、九月一日をもって、ハルビン鉄道第二〇連隊における全ての鉄道器材、武器、弾薬をソ連軍に強奪されたのである（完全武装解除）。

そして、ソ連兵監視の下に我々はハルビンより海林收容所への苦しい行軍を強いられましたのであります。

途中、戦友の腐敗した屍を乗り越え、合掌しつつ、苦難の末、海林へ辿り着いたのであった。

約二週間後、千名単位の編成により列車に乗せられ、「お前たちは日本へ帰る」、ダモイなのだとの言動に惑わされ、我々の貨車はシベリア鉄道にて北のハバロフスクへの方向を走っていたのである。

果てしない荒野をどのくらい走ったか、やがてイズベストコーワヤの駅へ着いた。そこで全員下車させられ、休む間もなく、ソ連兵の警戒の下、自動小銃で威嚇され、またもや北へ北へと。晩秋も過ぎ去り、冬將軍間近いシベリア最初のテルマ二〇一收容所にほうほうの体で皆崩れ落ちるように着いた。

ここでの捕虜生活は慣れない気候と環境、また「蚤」

「虱」などの媒体による伝染病「パラチフス」等の発生によって死亡者が続出するような事態も生じた。作業も次第に過酷になり、寒さと重労働の毎日が続くのであった。月日は全くわからず、時間は朝夕の日の出、日没で判断するのみであった。

数カ月たったテルマの夕刻、暗くなるころ、突然に厳寒の奥地モシカ收容所に送られた。私はこの地で帰国「ダモイ」の声を聞くまで丸三年間も絶望の苦しい日々を送ったのです。冬の平均気温は零下五〇度にも及ぶ極寒の地域であった。この時から私のラーゲル（收容所）生活が始まったのである。

雪山での重労働で、伐採、薪伐り、集積、材木積み込み、牛馬取扱、糧秣運搬などノルマを課せられて労働が割り当てられた。厳寒の夜間作業は体の芯まで冷え切り、身を切られような「しばれ」です。足踏みすれどもすれども寒く、天を仰ぎ北極星を虚ろな放心状態で眺めつつ、丸太材木を貨車に積み込んだ!! あの「巻いた巻いた」の悲痛な掛け声が、復員五十余年経た今でも夜空を見るたび、私の脳裏に甦り、感慨無

量です。

極寒の収容所で、大量に同胞が死んで行ったこと、朝起床の合図、そしてまた、隣人のベッドの上段の戦友を死体で発見……何という悲惨な死であったか。当時は自分自身生きることが精いっぱいであったのだ。彼も恐らく苦しみつつ、苦しみの中にあつて人の助けを求めようとがき苦しみつつ、しかし、それを言い出せず死んだ。何ということ。さながら生地獄とはこのことかと思つた。

次々の死骸の処理に、極寒の水結した山野の地表面は固く掘鑿困難であり、衣類を脱がせ、全裸体にし、死体を戸板で運び積み重ねた。重ねるときのあの鈍い音。耳に残り、生涯忘れることができない。

最後に、私のシベリア抑留生活において、終生思い出されるのは、入ソ初の収容所テルマにいたころ、抑留者はそれぞれ毎日の重労働と空腹に疲労の連続で、考えることは食べることに、故郷への思い、満腹感を紛らすためにあらゆる物を食した。モミの木の子、ソ連人の捨てた残飯ほか、だれしもが恥も外聞もなく生き

るための惨めな、情けない毎日であつた。ノルマに追われて百％以上の達成など到底できるものではなかつた。

私らには普通配給の食事しか与えられなかつた。ある日の夕食時、伐採作業で疲労も極度に達した日でありました。私は食堂で順番を待ち、自分の食事の分配を受けた。その日は食材が、大豆を煮詰めた食糧でした。一人一人飯盒を差し出して、ソ連人が監視する中で炊事人が柄杓で掬つて入れてくれた。ところが、私の飯盒の中には、大豆が数えるほどと汁ばかりでした。すぐ抗議を申し込んだのですが、彼らは受け合つてくれず、逆に不正を企んだのだといった剣幕でした。

口惜しく、悲しく、断腸の思いで涙を噛みしめて汁だけを嚥っていた私に、「おい川口、それではもたないぞ、俺のやつを半分やるから食えよ」と肩を叩いてくれた人物がいた。ランプの薄明りで透かして見ると、何と懐かしいではないか。ハルビン鉄道第二〇連隊幹部教育隊同期の戦友、松崎君ではありませんか。私は思わず彼の手を握り締め、感涙にお互い嘔び泣きまし

た。

「有り難う、有り難う。松崎よ、お前だって腹が空いているのに、半分もおれに分けてくれるなんて、何てやつなんだ」とお互いに手を取り合って、私らは感無量でした。真の友人とは戦友松崎のような人物。極限状況にあつてあのような行動を取れる人物。彼に対してどうにかして礼を尽くしたいと念願していました。そして、絶望的な一年有余を経過し、収容所内の人員も入れ代わり分散して行つた。私と松崎も別れ別れとなり、いつとはなしに音信も途絶えてしまった。

モシカ収容所では、私は作業中、優秀作業者であるとして、幸か不幸か作業大隊長に認められ、ペカルニヤ（パン工場）ベーカリー要員（パン製造人）勤務とのこと、決して楽な仕事場ではなかったが、食糧に関連する職場で、一般人より食物に関しては空腹を満たすことができ、ある程度体力を維持することができたのであります。勤務人事にと心掛け、精力的にパン製造に努力した。ここで製造したパンは、マガジン（販売店）に納入するものでした。このパン工場の管理者

はソ連人のマダムカマンジェール（女性所長）であつた。

パン製造方法は、積み重ねた煉瓦の室の中に細かく割った薪をサンダル式に組み立て、それを燃焼して、おきを取り出し、窯を焼き、その中に仕込み終えたパン生地を入れた型に流し入れて焼くといった、パン製造方法は原始的なものであったと記憶しております。

昼夜兼行作業で数百キロ近くのパンを製造し、良質な製品を作るべく努力した。按取り検査でもソ連人検査員からも好評を得、良い実績をつくりました。

風雪の荒れる日、カマンジェール（所長）宅よりの帰り道、前方から一台の馬糧を積載した人馬が吹雪の中を喘ぎ喘ぎ突き進んで来た。行き交うとき、私は思わず「ごろうさん、大丈夫か」と声を掛けた。下を向いていた相手が馬の手綱を引いていた顔をこちらへ向けたので、お互いに視線が合った。「おお川口」「おお松崎か」瞬時に相手が確認できた。今にして思うとき、私は奇跡としか考えられません。

まさに、青天の霹靂とはこの事か。絶叫し合った二

人は、しばし手を取り合って何も言うことができなかった。収容所で別離したなら二度と会うことはないと言われていたのに!!

やがてお互いの現状の立場、様子などなど、短い時間内で話し合った。彼は馴れない馬を使つての荷役の作業を課せられていたのです。私も現況立場を話したのですが、彼は頷いただけで、自分は今もう現場へ帰らなければならないとのこと。私は思った。何て心の清い奴なんだろう。私にパン一切れも欲しいの一言も言わないではありませんか。私は松崎をその場に待たせ、収容所に引き返し、パン工場に戻り、グループの組長に事情を説明し、戦友、同期の松崎に持たせるパンと、その場で食べるパンをシューバの下に抱きかかえて、一目散に松崎の所へ持つて行った。手渡された松崎は、目に涙を浮かべ黙したままそれを袋に入れた!!

これを最後に、私も彼もお互いにまた別れ別れとなり、戦後復員五十余年、この思い出は決して忘却されることはないのです。願わくば、戦友松崎の御健勝と

御多幸を心から祈念いたします。

九死に一生を得て帰国した私は、シベリア最果ての地に眠る我が同胞の英霊に心からなる御冥福を御祈り申し上げます。

【執筆者の紹介】

現住所 盛岡市黒石野一ー一七―二九

生年月日 大正十二年八月一日

学歴 昭和十六年三月 盛岡工業専修学校卒業

昭和十六年四月 岩手自動車販売(株)入社

昭和十九年一月 満州牡丹江六八部隊鉄道四連隊

曾我美隊入隊

昭和二十四年八月 舞鶴に高砂丸で復員

昭和二十四年十一月 岩手自動車販売(株)に復職

昭和四十九年五月 岩手三菱ふそう自動車販売(株)

退社(サービス部次長)

全抑協中央支部役員、慰霊事業実行委員

(岩手県 田辺 壮久)